

## 富山県生物学会創立90周年特集号 (54号) の発行にあたって

会長 南部 久 男

大正14年に富山県生物学会の前身である富山博物学会が創立されて以来、平成27年で90周年を迎える。これもひとえに、会を導き、運営に携わっていただいた、歴代会長、事務局をはじめ、多くの会員の皆様のお陰と感謝の念にたえない。この節目に、会にゆかりの元会長田中晋、本多省三、布村昇、元副会長・事務局長増田恭次郎の各先生にご寄稿をいただいた。心より感謝申し上げます。長い会の歴史を会誌をひもときながら90年間を簡単にふり返ってみたい。

初代会長菊池勘左エ門、進野久五郎の両先生は大正10年頃から富山を中心に動植物の調査を精力的に行い、それが、富山博物学会の創設につながっていった。とりわけ、昭和初期に7年間にわたり両先生らによって富山湾の生物相調査が行われ、1500種、1万点もの標本が収集されたことは特筆される。科学博物館あるいは富山県郷土博物館構想もあったようだが、戦争のため断念された。本会や様々な理科の団体との協働により、昭和16年には第1回富山県科学展が開催され、現在にいたっている。終戦までは会の活動が中断し、戦後再開され、教育制度と教科の改正にあわせて、昭和22年には富山生物学会と改称され、小・中学校、高等学校の先生の参加が増え、会は活性化した。同時に小・中学校や高校で理科や生物の研究会が創設されたため、教育研究をこれらの会にまかせ、生物学会は生物研究主体の活動を志向するようになったようだ。

昭和30～40年代の高度成長期に伴う公害問題や開発による自然破壊などから、市民の自然や環境への関心が高まってきた。生物学もミクロからマクロまで様々な領域ができ、全国規模の生物系の学会や地方でも様々な会が創設され、入会するものも多くなってきた。平成に入り社会がますます複雑化、多様化するにつれ、会員も多忙化し、会の活動も低下するようになってきたため、役割分担や会誌の充実など、会の基盤整備が行われ、さらに世代交代や富山県の生物相を明らかにする総合調査、ホームページの開設などにより、会は次第に活性化しつつある。

近年は、自然環境や生物相の変化がめざましく、絶滅危惧種や生物多様性が注目されるようになってきた。初期の会員を中心に、富山の生物が精力的に調査された際に収集された8万点ほどの動植物の標本は、富山市科学博物館に寄贈され、富山の生物多様性の変遷を知る上で、科学的で貴重な基礎資料となっている。

会の目的の一つは当初から「生物研究」とうたわれ、このうえなく生物(学)が好きで、様々なテーマをもった会員による活発で継続的な活動がこれからも会をささえていくであろう。100周年はまじかである。